令和５年度下期 関東森林管理局事業評価技術検討会　議事概要

１　日　時
令和６年２月 19 日（月）　10：00～12：00

２　会　場
関東森林管理局５階中会議室（WEB 併用）

３　出席者

技術検討会委員（50 音順）
岩岡正博委員、立花敏委員、山﨑靖代委員

関東森林管理局
計画保全部長、計画課長、治山課長、森林整備課長、森林整備課長補佐、資源活用課長、企画調整課長、企画調整課監査官、企画調整課監査係長

４　議事概要

○事前の評価について

［森林環境保全整備事業（八溝多賀森林計画区）］
［森林環境保全整備事業（鬼怒川森林計画区）］
［森林環境保全整備事業（天竜森林計画区）］

（委　員）　便益集計表を見ると八溝多賀森林計画区と鬼怒川森林計画区は木材生産経費縮減便益よりも木材生産確保・増進便益の評価額が大きくなっているが、天竜森林計画区では逆転している。３計画区の地域的特徴から、差異の理由を説明願いたい。特に、木材生産経費縮減便益に差異が生じている理由は何か。

（関東局）　計画区ごとに樹種構成、齢級構成が異なることが要因の一つであると考えられる。また、間伐実施面積の大小が影響を与えているものと考えられる。そのほか、天竜森林計画区の木材生産経費縮減便益については、奥山や急峻な地形であるなど、立地の影響が大きく、搬出する際のコスト等が要因となっている。

（委　員）　現在の便益集計表は総額表示となっているが、ha あたりの評価額も表示した方が理解しやすい。

（関東局）　ご意見を踏まえ、改善を検討する。

（委　員）　花粉の少ない苗におけるスギとヒノキの利用割合は地域によって差異があるのか。また、コンテナ苗の必要数は膨大になるかと思われるが、必要数を確保できているのか。

（関東局）　花粉の少ない苗の活用状況は圧倒的にスギが多く、ヒノキは全体の生産も少ない状況である。関東森林管理局管内では約 95％以上がコンテナ苗を使用しており、地域ごとの需給調整会議において、次年度に使用する苗木の必要数などを調整して確保している。

（委　員）　ヒノキにおける花粉の少ない苗はまだ少ないということは、ヒノキからスギへの樹種転換が起きているのか。

（関東局）　花粉症対策初期集中対応パッケージ等においてスギ人工林を重点的に伐採・植替えすることとしている。ヒノキを伐採したところについては、現地の状況に応じて樹種を選定している。

（委　員）　獣害防止対策の内容は場所によって対策の内容に差異があるのか。

（関東局）　一番多い獣害防止対策は、シカ柵で囲む方法である。場所によりツリーシェルター型の単木保護資材と使い分けしている。

（委　員）　ヒノキでは枝打ちはもう行わないのか。

（関東局）　建築工法や木材加工技術の変化により、現在は行っていない。

（委　員）　残っている天然林の利用はするのか。

（関東局）　多様性確保のため、天然林として残すべきところは利用せず残している。

（委　員）　作業効率の向上とコスト縮減の取組として行う伐採時の生産性向上とは、具体的に何を行うのか。

（関東局）　関東森林管理局では、新しい林業の実現に向けた実行プランの一環として、発注する事業において事業体に生産性向上のための取組の目標を立ててもらうことを必須事項とし、事業実施の結果を報告してもらい、評価をするという取組を行っている。

（委　員）　具体的には事業体ではどのような取組を行っているのか。

（関東局）　伐採から搬出、生産完了までの各工程についての人工数を分析してもらい、トータルコストを評価している。

（委　員）　生産性の向上が見られなかった場合、ペナルティはあるのか。

（関東局）　地形によって車両系の作業システムの導入が難しい場合もあるため、ペナルティはない。

（委　員）　事業体に生産性の向上の取組を任せてしまうと、環境への悪影響が大きくなってしまう作業システムを採られる危険があるのではないか。

（関東局）　事業着手前に作業計画を提出してもらい、林地保全を最重要視した施業となっているかチェックを行っている。

（委　員）　これらの取組が作業者の負担になることはないのか。生産性の向上を目指したものの、結果として向上が見られなくてもよいのか。

（関東局）　木材生産ではなく、多面的機能を発揮させることを目的に森林整備事業を行っていることをご理解いただけるようお願いしている。状況次第であるが、森林を壊したり、労働安全を無視してまでの生産性の向上は求めていない。

（関東局）　生産性向上だけを目指した方が、業者としては儲かるのだろうが、その結果として山が崩れるようなことがあってはならないので、事前にチェックする体制を整えている。

（委　員）　事業が終わった後の道について、森林作業道は林地に戻したりもすると思うが、次回使用時に改めて作るのはもったいないのではないか。

（関東局）　一貫作業システムにおいては、伐採後に作業道を活用して植栽を行っている。また、森林作業道は、その後の保育で使用するため、丈夫な構造の道づくりを行っている。

（委　員）　道を林地に回復させる場合はないのか。

（関東局）　保育期間が終わった後に、広葉樹等が生育する場合もあるが、作業道上に積極的に植栽はしていない。

（委　員）　評価結果について、それぞれの地域の特徴に応じた一文を入れた方がより理解しやすくなるのではないか。

（関東局）　ご指摘を踏まえて、上局とも相談して検討する。